

体脂肪比率と身体部位別脂肪量との関係
名古屋文理短大 ○鈴木 真由子 江上 いすず 長谷川 昇

<目的> 一般的に、肥満による皮脂厚の増加率は体の部位によって異なり、下腹部が一番大きく次いで、上腕後部、胸部、背部、腹部などであり、これらの部位は、体密度との相関が高いとされている。しかし、それぞれの部位における脂肪の増加が、体脂肪比率の増加と相関が認められるかどうかは明確にされていない。そこで本研究では、いくつかの身体部位における、近赤外線のスペクトル値（「近赤外分光法」沢井ら、体力科学 Vol. 39 155 1990）と体脂肪比率との関係を調べ、増加のしかたが一定かどうかを明らかにしようとした。

<方法> 被験者は、名古屋市内の短期大学に在学中の女子学生を中心とした。体脂肪比率の推定と、身体各部位の、近赤外線のスペクトル値（脂肪吸収帯付近）の測定は、フィットネス・アナライザー（ケット科学研究所製）を用いて、すべて同一人物が実施した。測定部位は、下顎、上腕（二等筋頂点・後部）、肩胛骨、腹部、下腹部、脇腹、脹ら脛（前後）、大腿部（前後）とした。

<結果> 体脂肪比率と身体部位別脂肪量との関係は、2つのグループに大別できた。1つは、下顎、上腕（二等筋頂点）、脹ら脛（後部）などのように、体脂肪比率が増すとともに有意にスペクトル値が低下する、すなわち脂肪が増えていく部位のグループ、もう1つは、体脂肪比率とスペクトル値の間に相関がみられない、もしくは弱い部位のグループであった。